

標準的神経治療

日本神経治療学会 ● 監修

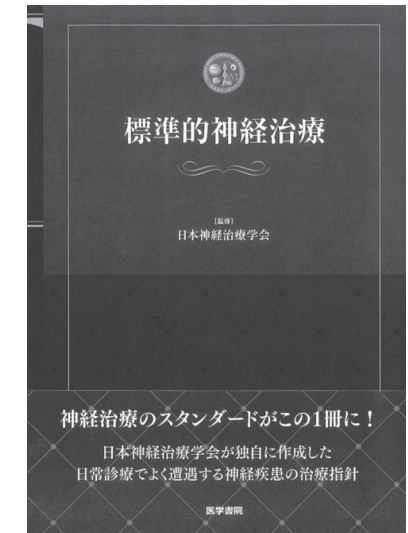
山口大学大学院教授・神経内科学 神田 隆

本書は日本神経治療学会創設 30 周年の記念事業として、2008 年から順次公表されてきた『標準的神経治療』を合冊したものである。ここに取り上げられている疾患は①手根管症候群、②Bell 麻痺、③片側顔面痙攣、④三叉神経痛、⑤高齢発症重症筋無力症、⑥慢性疼痛、⑦めまい、⑧本態性振戦、⑨Restless legs 症候群の 9 つであり、神経内科医だけが診る疾患よりも、より多岐にわたる診療科が関与する疾患に重点が置かれ、また、慢性疼痛・めまいといった神経内科医が日々の診療で困難を感じている症候が積極的に選択されているのがまず目にとまる。日常診療の中ではなかなか接することのできない他科の最先端の考え方も吸収しながら患者を治療したいという、第一線の神経内科医のニーズをよく理解した疾患ラインアップであると思われる。

本書の題名は『標準的神経治療』であるが、各章の記載の多くは治療指針のみにとどまらず、疾患概念、病態生理、疫学も含めた内容となっている。プラクティカルに治療はど

のようにしたらよいかをダイレクトに伝えるだけでなく、疾患の基礎的な理解にも踏み込む内容となっており、より診療ガイドラインに近い記載といつてよい。

個々の章はそれぞれの分野のエキスパートによる力のこもった内容となっている。専門医が非専門医師を含む多数の読者に対して、エビデンスに基づきつつも誤解を与えないよう適切な治療指針を伝えるのは大変難しいことであり、本書の著者も苦労されたものと思われる。中でも本書で最も充実した内容を有するセクションの 1 つと思われる①手根管症候群を例に取ると、まず冒頭にエビデンスレベルおよび推奨度の提示があり、以下の記述も、どのようなレベルのエビデンスに基づいてこの薬物・治療法が推奨されるかについての明快な記述がある。本来ならばこのエビデンスレベルと推奨度の提示は本書の冒頭に掲げて、すべての章がこの基本方針の下に書かれていれば、もっと統一感のある成書になったのではないかとと思われるが、一方、エビデンスレベルから少し離れ



て各薬物の使用法についてていねいに概説した章もあり、これもまた読者のニーズの一つを満たしているのではないかと感じた。各章で著者の意図するところが少しずつ違うことを理解しながら読むことも、読者には要求されるものと思われる。

全 9 章の中でも第 5 章の高齢発症重症筋無力症は、特定の病態に限定した記載を行っているという点で他の 8 章とはいささか趣を異にしている。しかし、このような最近話題になっているトピックスに対して迅速に回答を出していくという姿勢は高く評価されるべきであり、神経内科の臨床家には大いに歓迎されるであろう。このような神経内科治療のトピックスのみでまとめた成書も将来的には大いに期待したいところである。

B 5 頁 328 2012 年
定価 9,975 円
(本体 9,500 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-01657-5]

医学書院刊